

平成 13 年度

調 査 研 究 計 画 書

<input checked="" type="checkbox"/> 経 <input checked="" type="checkbox"/> 常	プロジェクト	共 同	受託	応募
--	--------	--------	----	----

研究課題名	自然海浜・干潟の価値を経済的価値に置き換えて評価しその意志決定要因を検討する			
研究責任者	<input type="text"/>	<input type="text"/>	所属	企画情報室
共同研究者				
共同研究機関	環境保健研究センター			
研究期間	平成14年度 ~ 平成15年度		<input checked="" type="checkbox"/> 新 <input checked="" type="checkbox"/> 規	継続 終了

研究の端緒および目的

今日、藤前干潟などに見られるように、自然海浜や干潟の自然環境への好影響及び人と自然とのふれあいの場、アメニティ景観などとしての価値が見直され、それらを積極的に保全しようという動きが活発になっており、開発側と保全側との対立もみられる。

このような場合、開発側と保全側の目指すところや価値観の違いなどにより、その調整は難航し、話し合いは平行線をたどることがほとんどである。そこで、開発側においては、その事業のリスクと便益分析を行うことがマニュアル化されはじめ、保全側でも保全しようとする環境の価値を経済的手法などを用いて客観的に評価しようとする試みも見られるようになった。

このような試みは、自然海浜や干潟、森林などの存在価値などこれまで客観的な評価に馴染まなかった自然環境資源の価値の客観的な評価を可能にするとともに、好みや価値観の違いなどの抽象的な議論を具体的で客観的な議論の場とすることも可能とし、開発と保全の対立に調整の可能性を提供するものと考えられる。

また、そのような環境の経済的な評価を行う人の評価過程（意志決定過程）を形づくる要因を抽出・解析することによって、人が自然資源を保全しようとする価値構造を知ることが出来、経済評価（客観的価値評価）と併せて開発と保全の間によりコンセンサスの得られやすい場を提供出来る可能性があるものと考ええる。

そこで、県内の自然海浜又は再生干潟を対象として、県民に価値の経済的な評価および利用価値、景観価値、存在価値等に関する要素についての評価を訊ね、その結果から経済的価値評価と心的価値評価過程との関係を探り、対象とした自然資源の経済的価値およびそれを形成する心的価値構造を把握する。